

ゆく の 行 野



1 集落の歴史

(1) 地名の由来

東隣の大島村との分水嶺となる大倉山に連なる山地から、行野川が西へ流れ出ている。西隣の和田や大原からこの川をさかのぼると行き止まりに集落がある。また、この川沿いを除く三方は緩斜面で、野原のように広がって田畑になっている。このように行き止まりにあり（自然地名）、野原を田畑にしている（利用地名）ことから、「行野」となった。

(2) 集落の形成

佐藤扶桑師の「恵心尼研究叢書」に「江野源太郎・延喜13(912)年癸酉年正月元旦生、

江野庄行野村に生す」とある。また、字上壇・下村の墓地に室町期(1336~1573)の五輪塔・宝篋印塔ほうきょういんとうが祀られている。これらのことから、平安時代に既に人が住んでいたと推察できる。しかし、史料として見られるのは、文



写真 3-73 「慶長2年越後国郡絵図」ゆくのかの村
(米沢市 上杉博物館蔵)

禄年間（1592～96）の頸城郡絵図である。絵図には「直峯分吉田与吉郎分諸越彦七郎分ゆくの村 中、本納（年貢）7石8斗6升5合・縄ノ高（取高）28石9斗3升8合、家6軒・18人」とある。当時としては大きな村で、直峰領として吉田、諸越、2人の支配下であった。その後の新田開発により、天和3（1683）年の検地では高34石9斗余と増加している。戸数や人数の記載はないが、確実に増えたと想像できる。

行野村は江戸期～明治22（1889）年の村名で頸城郡くびきごおりのうち、初め高田藩領、天和元年からは幕府領であった。明治12年から東頸城郡に所属し、同22年、行野村（明治22年4月の新しい村（『新潟県町村合併誌』上巻）によると「本村は山間にあり自然の区域をなし四隣交通不便にして他に合併する途なく且資力はやや独立自治の目的を達し得るものと認むればなり」とある）となり、同34年、小黒村行野となる。昭和30（1955）年から安塚町の大字となった。

（3）戸数と人口の推移

史料による人口の推移は表3-13のとおりである。

表3-13 戸数と人口等の推移

年号	西暦	戸数	人口	石高等
慶長2	1597	6	18	縄高28
宝暦3	1753	55	497	
天保11	1840	87	550	
明治2	1869		592	
明治5	1872	89		
明治22	1889	102	608	
明治34	1901	92	556	
昭和12	1937	93	600	
昭和30	1955	90	532	
平成12	2000	33	77	
平成15	2003	30	64	

昭和30年の町村合併時に90戸・532人だったが、生活形態や経済機能の変化で過疎化が進んだ。行野小学校の児童数は、昭和32年の93人が昭和45年には31人となり、和田小学校と統合となったことでもうかがい知ることができる。

（4）地理的環境

東隣の大島村仁上境に標高497.4mの大倉山、南隣の樽田境の字霧山は348m、北隣の細野境の字外山は375mである。西隣の和田と大原の境へ行野川が流れ出ている。この三方の尾根から行野川に向いて、なだらかな傾斜地を形成している。この緩斜面に田畑や住居が、標高240～300mの間に広がっている。

写真3-74の絵図は、元禄時代のものかと思われる。行野川が2本の支流を集めて南西に流れ、和田村と大原村の境に出ている。当時、3カ所に堰が見られるのは、水田化のための水利工事の結果である。堰を造り、水田にしたのである。また、田より畑が多いのは、天水田としての地下水の掘削や溜池の造成が困難だったことによるとと思われる。



写真3-74 行野村絵図（坊金 竹内正俊家文書）

（5）道路と交通

写真3-74「行野村絵図」を見ると、当時は和田街道が吉沢を経て、村の中ほどで仁上

街道と樽田街道の2本に分かれている。

新道路法(昭和27年6月10日第180号公布)で、現在の県道「高田保倉柏崎線」になった。県道の幅員拡張及び舗装工事は、年々計画的に行われてきた。この県道は、大字和田字柳沢から行野川に沿って東に上り、字平畑で吉沢からの道と合流し、字北山の行野峠より大島村棚岡に通じている。町道は字大下から字大倉へ急坂を上り、字吉沢峰を経て字平畑、字上壇に通じている。現在、旧和田街道沿いに道路改良工事が施工されている。一方、水田の構造改革に伴う農道が発達し、旧樽田街道、平畑から細野に通じる柿木線は農耕車両の通行が可能である。しかし、字大峰から大島に通じる旧仁上街道と字上壇から大島村石橋へ下る道は、徒歩以外での通行は困難である。

冬季の通行が難渋していたが、道路の改良と除雪体制の充実により通勤、通学等に支障はなくなった。また、東頸バスが行野公民館



写真3-75 大倉山から見た「行野集落」



図3-10 行野地内道路地図 (安塚町役場資料)

・本郷間を1日4本往復している。

2 宗教と信仰

(1) 神社信仰

村社は諏訪社で、行野上壇にある。明治政府の神社統合政策により、十二社・若宮社・松尾社・江野社を合祀した。祭神は、建御名方命、天神七代・地神五代の神、誉田別尊、大山咋命、市杵島姫命である。春祭りは、4月27日に近藤宮司によりお祓い祭礼を行う。秋祭りは11月13日で、高野宮司により司祭が行われる。



写真3-76 行野上壇の「諏訪社」

(2) 地藏信仰

行野村絵図に、和田街道沿い吉沢に地藏堂が描かれている。ここには、地藏菩薩を祀り、以前集落内で起こった地すべりを止めてもらうために地すべり地の頂上に建てられたものである。しかし、近年になって地すべりも止まり、お参りするにも不便になったため、現在地に簡単な祠を建てて納めた。以後毎年、高野宮司に依頼して祭りをしていたが、今では行われていない。このほか、行野地内に2体の地藏菩薩が祀られている。このことは、行野も御多分にもれず地すべりに苦しんだことを物語るものである。

写真3-77の石祠は、地藏菩薩を守るために後日建てたものである。



写真3-77 県道沿いの高台の「地蔵菩薩」
(横尾耕仁管理)

(3) 不動明王信仰

前記の地蔵菩薩を中心に、不動明王4体が左側に並立して建っている。写真3-78の左から順にそれぞれの特徴を紹介する。

- ・不動明王 船形火焰光背で宝剣と羂索けんさくを持つ像容で、女性的な像相である。
- ・不動明王 不動明王の特徴としての念怒の形相も像容も力強さがなく、あどけない。
- ・成澤不動明王 像ではなく文字で表している。
- ・不動明王 多くの不動明王の持ち物とは逆である。

不動明王は、密教で大日如来の化身とされる仏教の守護神。怒りの相で右手に剣、左手に羂索を持ち、火炎を背負う形で表され、八大金剛童子を従える。



写真3-78 4体の不動明王

(4) 浄土真宗信仰と行野十七日講

天保11(1840)年の宗門人別改帳控(明治大学刑事博物館蔵)では、小黒の専敬寺の旦那は家数87、人数550とある。行野村の専敬寺檀家は、近世初頭(1592~1614年)の第12代本願寺教如書状(専敬寺文書)に「行野村十七日講中」とあり、専敬寺の取り次ぎで大原村、小黒村、樽田村など10講中とともに銀

子100目を懇志として教如に納めている。上杉謙信が一向宗の布教を許してから、越後の国には信者が急増し、行野にも十七日講があって毎月17日に念仏の教えを聴聞し、その後教えについて座談したという。現在でも行野の横尾姓と石田姓の大方は専敬寺檀家である。行野に寺院があったという記録はないが、口伝によれば、明治政府による廃藩置県(明治4・1871年)施行までは小黒教願寺の寮があり、八木覚應が布教していたという。

行野の火葬場は、下村と袖沢田の2カ所にあったが、現在は墓地になっている。

(5) その他の信仰

1月中旬の日曜日に塞の神をする。ワラが少ないので個々にカヤを刈っておくことにしている。塞の神では、どこの集落とも同じで五穀豊穡と無病息災を祈念する。